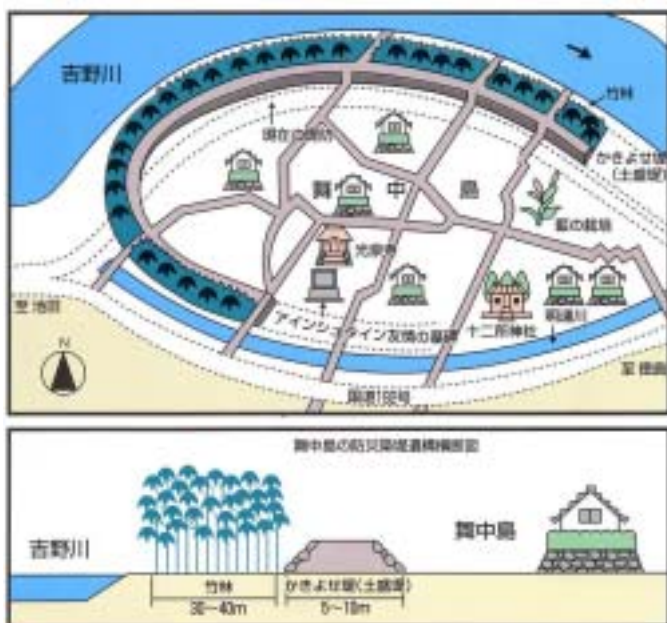


2 - 2 水害防備林

吉野川には、水害防備林と呼ばれる竹林が、両岸に連続して存在していました。水害防備林は、水の侵食から河岸を守るとともに、万一川が氾濫しても被害を軽減する働きがあります。連続した堤防が築かれるまでは、緑の堤防として地域の人々の暮らしを守ってきました。

吉野川の両岸には、現在よりも長く竹林が連続して存在していました。戦前、徳島本線は竹の美林に沿って走る鉄道として有名で、その美しさは日本一と称せられていました。大規模なものは、幅300mもありました。

出典：「四国三郎物語」徳島工事事務所



出典：「四国三郎物語」徳島工事事務所

昭和30年頃には、約60kmにわたり約510haの竹林が存在していたと考えられています。しかし、平成9年現在、約370haまで、竹林の面積は減少しています。

竹は、その地下茎が絡み合って繁茂するため、地盤を強くし、水の侵食から川を守る働きがあります。万一、川が氾濫して水が急襲しても、ある程度は密に生えた竹が水の勢いをそぐため、そこで氾濫が静まり、浸水こそすれ、堤内の人家や田畑が流出するようなことまでは防ぐといった機能があります。

藩政時代には、河川敷の竹林は藩が所有していました。徳島藩は、水害防備林として、柳や竹を植えることを進めていました。明治以降、竹の無い沿岸に竹林が造成され、大正時代には、県が補助金を出して、竹林の造成につとめたこともありました。

しかし、食糧難の時代に、岩津から下流の竹林はその多くが開墾され、畑になりました。また、昭和35年から45年頃にかけて、徳島県下で一斉に竹が開花し、枯死する現象が発生しました。このとき、残っていた竹林も伐採され、採草地や畑になりました。このため、岩津よりも下流では、かつての見事な竹林は見られなくなりました。ただ、岩津より上流では、そのまま放置したところでは、竹が再び生え始め、十年ほどで昔の姿に戻りました。

岩津より上流では、竹林が連続していたことの景観をしのぶことができる場所があります。ただし、今残る竹林の多くは、手入れがあまりされていないため、昔ほどの美しさはありません。川と人とのかわり方も、竹林の景色とともに変化しました。



瀬詰の区有竹林

出典：「四国三郎物語」徳島工事事務所



三加茂町の竹林

出典：「四国三郎物語」徳島工事事務所



今も残る連続した竹林（三加茂町・三野町）